

No 17427/22

特49  
361



分一原於  
家皮

本教發長鴻宮



例言

一 此篇ハ本教ノ信徒初學ノ者ナシテ、開闢祝詞陽祝詞不動祝詞ヲ了解シ易カラシメムガ爲メニ之レヲ注解ス仍テ題シテ御嶽教三要祝詞畧解ト曰フ、而シテ其俗言ヲ用フル者ハ或ハ古言ヲ學バザル者ノ便トセムガ爲ナリ、

一 此篇務メテ簡チ要スルハ、信徒ナシテ速ニ其大意ヲ知ラシメムガ爲ナリ、故ニ纔カニ考證ヲ録シテ長文ヲ省ク、若シ其詳ナルヲ知ラムト欲スル者ハ當ニ卷中ニ舉ル所ノ諸書ニ就テ見ルベシ、

一 祝詞集ノ中、大祓詞、天津祝詞ハ、別ニ先哲ノ注釋セルモノ數本アリ、故ニ之ヲ除キテ解セス、

一 祝詞集ノ中、清淨祓、百体清淨太祓、産土神祝詞、三靈神祝詞、祖先祝詞等ハ、初學ノ者ト雖、既ニ注解セル三要ノ祝詞畧解ヲ能ク了得スル時ハ、

自然其文意モ曉ラルベシ、故ニ煩ハシク之ヲ注解セス、  
一本書中、國常立尊ノ成出座ル事、及ビ其神德ノ説ハ、古史傳靈之眞柱等  
ノ説ト大ニ異ナレ、此書ハ、本文祝詞撰述者ノ本意ト、御嶽教ノ本旨  
トニ依テ之レヲ注解ス、故ニ看人は是レヲ尤ムル事勿レ

明治二十二年五月

千秋舎主人識

○ 開關祝詞
○ 陽之祝詞
○ 不動祝詞
○ 御嶽山開關緣由
○ 神德教以呂波歌

稱揚國常立  
尊神德以示  
惟神大道矣

御嶽教三要祝詞畧解



御嶽教祓教會大教監  
中教正本田瑞穂謹解

夫吾國者天地止神靈俱爾顯禮坐須故爾國乎神國止云道乎神道止云  
夫とはアハと譯して發端の辭あり吾國とは即ち神代より葦原の瑞  
穂乃國と號けし此の皇國のことあり扱此國の開闢は造化神の玄妙  
不思議乃靈徳以因て言難き一物が大虚乃中ニ成出で其物即て天地  
神と化生せる傳へあるが故乎日本紀に天地初判始有俱坐之神號  
國常立尊と有て恐くも此の大神の御功績を大海の一滴程を稱へ揚  
奉る乎先皇國は功績を以て名に負ふ習はし故萬神の御名も大方は  
其功徳を御名に負せ給ふ事なり然れば此の大神は天地と分ると時

一物の萌昇るも乃依りて、國の根底より高天原に成出坐たる大神  
よて、御國乃天地と共に久しく成立榮ゆくべき御爲、大地の底津根  
より、高天原まで立貫きて、大八島洲の御柱を太敷立るとも云ふべく、  
其が大元處を神議りお議り定めて、萬邦の元首たる皇國の大根を堅  
石并常盤と動くこと無く變ることなく物仕置かせ給へる奇妙ある、  
最尊き御功績御座す大神あるが故、國之常立尊とも國之底立尊と  
も申し奉るあり、平田翁の説は根の國の底に生出して後切ればふれたる  
月界に座す神ありとあれと今は取りて書記の意に依る  
故に以下國常立命は即ち天之御中主 亦御名の國と云ふ言は、俗に國圍  
神と異名同一体分身と見奉るへし  
あを云ひ又家の回りの垣をくねと云へるが如く、廣くも狭くも區別  
の限り有る其處々の土地を何々の國と境を分ち定め云ふ辭あり、又  
常立のトコと云ふ言はとこしへなべのトコと云ふ言は、俗に國圍  
コの義よてトはとまるのト其のコは疑堅まれるのコなり、立と云

お言はたたんちたつたてと活用ける詞おて、斷の義おも通へと今、  
は立の義よて、神國の天地と共に易ることなく常へに立榮ゆべく  
き其大元の本津國地乃体たる塵泥の集ひ止りて最も堅く凝り固ま  
れる所より成立る皇國の大本を創立鎮定し給ふ、最も尊き御功德あ  
らせらる、大神と云ふ御名の義なることを知りて、神惠を報すべき  
が、皇國の人たる者の義務ありける、神皇正統記曰、大日本は神國なり、  
天祖始めて基を開き日神永く統を傳へ給ふ、我國のみ此事あり、異朝  
みは其類ひなし、故に神國と云ふあり、神代には葦原の千五百秋の穗  
穂國と云ふ、天地開闢の初より此の名あり、天祖國常立尊陽神陰神  
よ授け給ひし、救子聞ひたり、天照大神天孫尊に譲り坐し、此の名  
ほかあまた  
あれは根本の號とは知りぬべしと、是神國と云へる證なり、此の他數多  
に違  
如是尊き皇國お傳へ行とると、惟神の大道なる故に之を神道と

云ふなり、

國者千界乃、根本奈利、故爾日本止云布

此皇國は、支那、印土を始め、西洋諸國の中の大根本と云ふことにて、人の身体亦譬ふれば、最も大切ある首にして、餘の國々は手足の如し、故に稽古要畧曰夫日光照臨万国、其尊無二而其神生於此國且其孫永都於此國、此知皇國爲万国之宗實是公論矣と、本居翁の歌に「國々亦傳へは有れど、日の本の、本の眞の事ハ傳はると有て實ハ四海を照臨坐す、無上至尊と稱へ奉る、天照皇大神の生坐せる、本津御國あるか故に日の本と號け、又大日本とも訓まり、具にハ國號考を風雅集民部卿爲定公の歌に限りなき、惠みを四方よし、しき島や、大和島根は、今榮ゆなり、神止者常乃神爾非須、天地爾先達、天地乎鎔造賜布乎眞神止曰、此の常の神ハ非ずと獨り撰び給ふと、先天地剖判して人の世と成て、

後漢土にて鬼神西洋諸國、上帝眞神と名けたるを初め、或と其の靈神或と何の明神とぞ、種々に世人より稱し祭れる尋常の神とは大に別なりと云ふ義あり然らば何の神ぞと云ふ、天地ハ先達て、天地萬物を鎔造給ふは、天之御中主神と稱へ奉る、即ち國常立尊と同一體異名おして、天地を靜謐し昇降の一氣乾坤に遷移して、万物に靈たるの精神あり、故に神皇正統記に、國常立尊と申す、又と天之御中主尊とも號ま奉るとも有り、尋常の神おあらずして、無上至尊の大神ハ御座すことを知るべし

道止者常乃道爾非須、乾坤爾越豆、乾坤爾行留乎眞道止云、

老子が道可道非常、道名可名非常名と、いへる如く、諸宗諸道の人造、教道とぞ、大に其精神を異にする所の、天造教道にして、所謂惟神の大、道なり、其体たる靈玄微妙、其用たる古今に亘りて不易万物に洽くし



て遺さず、然れば万邦と雖も、人の人たる者と、不知不識此の大道を踏  
ざる者あし故、斯道は活眼を以て観る時と、手足踏舞の間に在りて、  
其遠近は之を知るを知らざるに在るのみ、

神性不動、志豆動、伎無形、仁之豆現、形是則不測、乃神体奈利、

神性とは即ち國常立尊の御靈升して、寂寥たる大空に聲もなく臭も

なく、常久に御座す之を不動の神性といふ、所謂論語に爲政以

徳譬如下北辰居其所而衆星共上之と有が如く此の神性不動にして動

き、无形より有形を現とし給ふ、眞丹不測の神体なり、

天地余在豆波神止云、萬物余在豆波靈止云、人倫余在豆波心止云、

天地又在てと、天之御中主神、亦は國常立尊と申し奉り、万物に在ては

靈と云ひ、人又在ては心と云ふ、心とは古言ハコリコルの約りたるよ

て即ち神魂の凝りて万事に活用ざるを云ふ名あり、

心者神明乃舍留、混沍乃宮那利、混沍止者、天地陰陽乎不分、喜怒哀樂未發、  
是心乃本体奈利、

日本紀云、古天地未分、陰陽不分、渾沍如鷄子と、是亦依て之を思

へば、心とこりこる人の精神と、元乾坤未分の時に在る、神靈の分魂升

して、而して未だ陰陽を分たず形体なければ、身丹觸れて喜しき事も、

眼も見て怒ること、耳も聞て哀む事も、口も味ひ語りて樂む事も、發

らざる以前に在て、無念無想の所、即ち心の本体ありける、

心止波、一神乃本、一神止波、國常立尊乎云、

此と神人合一、元來不二乃玄理を顯とすなり、言心と各、自の一心と、

即ち一眞神乃分魂とて、其一眞神とて、國常立尊を申し奉るあり、荷

田東麻呂の歌、世の中、神の道とて、道あらと、人の外なる人や學ば

んと此意を以て、神人合一の旨を了解すべし、  
玄理を了知せんと思は

明產靈神之  
妙用以示萬  
物生成理矣

本教要義に依り伊吹鎮魂術を  
修して其教師の秘訣を受へし  
斯神波元形乃形元名乃名奈利是眞源太素乃尊神止奉號  
古事記序に混元既疑氣象未効無名無爲誰知其形と有か如く  
天地未だ分れざる時は其神靈のみ座坐して形を現とし給えねば其  
御名を稱へ奉る者もあし然る丹大古開闢の時其神徳を現とし給ふ  
か故に尊敬して眞源太素の尊神と稱へ奉るなり  
此眞源與利一天四海大千世界止成一心與利三千大千乃形体乎分都  
大虚は一物成れり其一物天地日月星と成れりと神典又在が如く彼  
の眞源より皇國を元始として万國大千世界と成立せるも悉皆彼  
の眞神の一心より其形体を分ち給ふとあり  
故爾森羅萬象蠢動合靈都互一心與利始互産靈神乃妙用爾因互生成無  
窮那利

稱揚天照大  
神之光德以  
示國威耀万  
邦矣

故よとは上の國常立尊の功徳を揚たる句を受たる辞よして森羅万  
象蠢動合靈都て彼の眞神比一心より始まり成て而して高産靈神  
産靈神の奇く妙ある作用因て動物は成長活動し植物は花咲實を  
結びて生成窮りあしとあり猶産靈神の功徳の事は古史傳志斐賀他  
理等お詳あり  
心乃根本者一神與利起里國乃宗廟者萬洲乎照須  
心の根本云云とは既よ上よ解たるが如し扱國乃宗廟云云は天照皇  
大神の功績を稱揚し奉る也此皇神は伊邪那岐尊黄泉穢惡を禊祓給  
ふ時よ生坐せる皇神丹座坐すが故よ書紀丹は此子光華明彩照徹於  
六合之内と有て光明を放ち給ふが故よ汝は天津日の國を治らせと  
父の尊の事任し給ひしかば其御依しの隨意も天津日の國を主宰し  
造化の徳を大成し給ひて神代より無窮よ一天四海を照臨し給ふて

ととは成れり又皇孫尊天降給ふとき天照皇大神御自の御靈を寶鏡  
に移し給ひて皇孫命ヲ授け給ひき故に古事記に之鏡者、專爲我御  
魂而如拜三吾前、伊都岐奉と有て皇孫尊其御鏡を受給ひしより皇  
統連綿と御世々々の天皇と御傳まし終に垂仁天皇御世也今の伊勢  
國五十鈴川の邊に大宮所を定め移去祭らせ給ひき是即ち今の内宮  
なり本居翁の歌に、常久へ丹世を照します日御靈、つけし鏡は伊勢  
の大神と有て、是を即ち天子の宗廟と仰ぎ奉り給へり然れば天上と  
て日神の世界万国を照臨煦育し給ふは即ち伊勢の宗廟の皇神の御  
光徳の赫々たるるなり其赫々たるる御光徳と、即ち今上天皇の御威光の  
照々たるるものなりと、敬事奉るべし、  
一水乃徳乎以豆、萬品乃流乎育須留賀如志、  
此は上と揚たる、大神等の神機妙用の功徳を譬へて云へば、一源の水

一心者明爲  
百教本以示  
神道尊嚴矣

の、千万に分る、流を生々するが如しとあり、  
孔聖釋佛乃教止雖母、斯一心乎教留爾外奈良須、  
孔子曰、吾道一以貫之、  
性至命、  
脩身、  
虛靈知覺、  
其性則知天、  
外無別法、  
阿彌陀經云、  
を擧るのみ、是又依て、聖人孔子の教へも、釋迦氏の教へも、唯一心を悟  
り得せしむる爲又外ならねば、皆眞の一心と歸せるといふ理を曉る  
べし

不偏不倚の中にして心の本体なり  
易曰窮理盡性至命  
性至命とは即ち天徳にして人々受得て性と云ふ其性知覺を合せたは大學曰  
性至命  
性とは即ち天徳にして人々受得て性と云ふ其性知覺を合せたは大學曰  
性至命  
性とは即ち天徳にして人々受得て性と云ふ其性知覺を合せたは大學曰  
性至命

大道一元天地一貫萬派乎一源爾回志一源乎萬派爾分都、

斯の惟神の大道は縮收する時は、一神又皈し、放廣する時は、大千一彌滿して、天地を一貫きたること、譬へば萬派と分れたる、數々の支流も溯れば一元の源水あり、其源水も分流されは、又萬派も成といふ義あり、

自在活潑乃神道其源在我國、生於我國人類不幸乎、一天四海吾神國乎不仰哉敬白、

既に上よ云へるが如く、天地間又行はる、天然活潑たる大道の根元は吾皇國おして、地球上の人類も不知不識斯道光を蒙ひらざる者とあしと雖も、就中神裔正しき、此御國お生を稟たる人類は實も有難き幸福あり、然れば吾國の人民は云ふも更なり、假令萬邦の人と雖も、其元首たる神國を敬ひ仰がずば有べからずと、自ら信じ他をして信せ

しめんことを、請祈敬白すべきことあり、  
○陽祝詞

掛卷母畏伎御嶽山爾鎮坐須國常立尊、大已貴大神少彥名大神乃大前爾、慎敬白佐久、

掛卷母とむ、詞掛んも畏れ多きこと、云ふ意ひて、麻久の約まり、ム  
なり、國常立尊の事、の開闢祝詞に解たるが如し、大已貴大神亦は大國主  
奉少彥名大神、二柱兄弟とあり相並びまして、戮力同心此の皇國を開  
拓經營し、病者の爲に温泉を開き醫藥禁厭の方を定め、或は憂苦を  
除れ、身体を養はんが爲、酒を醸造し、總て、國民の爲、丹廣大の功績を  
まし給ひき、然して大國主神と、皇孫尊天降り給へる時、速も此御國を  
譲り給ひ、且國民を治むる御政の現事を皇孫尊も譲り給ひて、御自は  
幽事とて、國の治乱吉凶及び人の生死禍福を、凡て誰か爲さざるも

知らず行たる、神事の原を裁判主宰し給ふこと、成らせ給へり、本

居翁の歌に顯事は大君幽事と大國主の神の御心と有て、國民として

此の二柱の大神の恩頼を蒙らざる者とあし、猶三柱大神の事及び御山

開縁由を見

豐葦原乃中國爾生留、天乃益人等賀過犯氣牟種種乃罪穢乎祓清互、

國號考云、豐は美稱めて葦原とは上代又は四方の海べたは、悉く葦原

にて、其中に國處は有て、上方より見下せば、葦原の廻れる中に見ゆけ

る故、高天原よりかくは名けたるありと有り、天乃益人とは、古事記

に伊邪那美命吾一日絞殺千頭と詔ひまよ、伊邪那岐命吾一日立二千

五百産屋と詔へりと有り、此れは依て世人死るより生る、が多けれと、

益人とは云ふなり、天と譽て云ふ詞あり、かく彌増に生る、人々が過

て知らず、罪を作り犯すとて知りつ、罪を作りし種々の身の穢

悪心の穢惡を、祓清めてといふ意なり、

天津祝詞乃太諄辞言乎以互、此乃齋塲乎祓清奉留、

天津祝詞の太諄辞言の説、種々あれども、總て云ふ時、天津神の依し

給へる御言よて、鎮火祭詞の如き、即ち其なり、別て云ふときと、祓清詞

あり、

委くは平田翁の天津祝詞、其の次の本文の祓清奉ると有る詞、

齋塲とは即ち祭の塲を云へり、

此乃御山爾鎮坐須、東波三十餘八乃社、南波二十餘八社乃大神等及天神

八百萬、地祇八百萬乃皇神等降、鑿光助賜比互、

此と文面の通り知り易かれは強て解せず、

諸禍事罪穢乎、級名戸乃風乃天乃八重雲乎吹拂事乃如久、

禍とと、史傳云麻賀は萬の凶惡ことを云ひて、即ち禍字の意あり、祝詞

式も惡事、古語我許登と見ゆ景行天皇の卷も禍害多と有を以て、其意を曉べし、罪穢とと上云へるが如し○級名戸乃風は後世の事なり日本紀曰、伊弉諾尊曰、我所生之國唯有朝霧而蒸滿之哉、乃吹撥之、氣化爲神號曰、級長戸邊命、赤云三級長是風之神也、此の志那都斗辨命、志那都比古命、の名義、志那は日本紀纂疏に、息長と云はんが如しと有、長を那と云へる例は磐長比賣命を文徳天皇紀に石奈比咩とあり息をしと云ふ都は例の之も通ふ助例は息長鳥を志長鳥と萬葉集に云へるかことし、都は例の之も通ふ助辭なり、斗辨の斗は、是も之に通ふ、斗にて助辭なるべく、辨は大斗辨神の辨と、同く賣丹通ふ辨なり、然れど此御名と息長之女神と云はむか如と、平田翁云へり、神のことなり其は此の二柱の神と、伊弉那岐命の蒸滿る雲霧を撥ひ給ふとして、御息を長く吹給ふべく、其御息より生給へる故も息長と云を御名を負せ給ひて一切の風を主宰給へるあり、故斗今其神の御助と、其風の力を以て、天の八重雲を吹拂ふことの如く

罪穢を祓給へどあり、神の功徳の廣大なる事及び息長と云に付て無病長生の修術ある事ハ予が先に著はせる本教要義を見て知へし

天須賀麻乃清々敷

天の例の譽稱たる言なり○須賀とは清淨とを云ふ、故も太古須佐之男命天原にて、惡事行ひ給へるによりて千坐置處の祓具を科せて罪を贖ひて心の清まれる時我心清々しとのたもふと神典も在り、○麻は阿佐なり、此は祓の時用ふる具ある故かく云へり然れば、此一句は清々敷といふが爲に冠らしめたる辭なり、

祓清豆、乞願奉留事乃隨爾、大神達乃御稜威乎、所寄惠幸給閉止畏美母白、上に云へるが如く、諸の罪穢を祓清めて清々しき誠心を以て、願事を申すべし、尚書曰鬼神無常變々于克誠とあれは貪慾思想其願ひとは、先天下泰平、寶祚悠久、万民康樂あらむ事を願ひ、次も吾思求ところを

願ふべし、かく乞願奉る事の、随意、大神達の御稜威を寄せ授け給ひて、  
 御仁惠幸給へど、慎み敬ひ畏み恐みも申し上奉るべし、  
因に云清々しきを誠心に至り大道を了得せんと思ふ人は本教要義に依て伊吹祓を修し解除の神傳を受へし只大道を了得するのみならず養生除病の効驗ありて生前死後の康樂を受ん事疑ふへからず

○神道不動祝詞

天地未剖判時有一眞神

天地未だ成らざる時より天の最中寂寞として動徙せざる、無邊無際の大虚空中に坐まして、宇宙の萬物を悉く主宰し給ふ、一眞神御座せり、是を天之御中主神と申し奉る、  
 斯眞神、有造化育福善禍淫之大威徳、

此眞神、天地世界を創造し、万物を化育し給ふ大徳と善人には幸福を授け、惡人丹は災禍を興へ給ふ、大威力坐すとあり、是所謂造化神理の

爾らしむる所あり、故に殷湯と天道、福善禍淫と、  
淫者字書過也亂也奸也、説文淫者、濫理也

也、私也トアリ、云ひ孔子は積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、

と云ひ孟子は禍福由己と云ひ一條兼良公は、莊子の語を引て、人為惡

於顯明之地、則帝皇誅之、人為惡於幽冥之中、則鬼神罰之、爲善護福

亦同之、と云へり然れば人たるもの五常、智信也、の道を明らかにし、益

善徳を積み、慎みて惡業を爲さざること勿れ、

有鎔造化育之徳、故賦人以和魂之仁、有福善禍淫之威、故賦人以荒魂之義、

眞神より人に眞魂を賦與し給ふ時、この和魂荒魂を授け給ふとあり、

偕この和魂のニギと云ふことは、アラといふ又對するの古言ひて、其

例多し、和多閉、荒多閉、和稻荒稻、あといふ類ひ又物の麤きと精敷とも

云ふ、強きと柔あるとを云ふ、又人の家あとの荒る、と、饒はふと

又浪風の騒ぐを荒る、と云ひ、靜まるを和くと云ひ、神の心あとも荒

る、と云ひ、和なごと云ふ、此等のことを思察して、和魂荒魂なごたまごてふ名義を了知すべし而して其徳義を云ふ時は、和魂なごたまごは仁慈温順篤厚柔和等じんじおんじゆんあつこうわやくの妙用を具し、荒魂あらいたまごに義烈果斷武勇剛強等の妙用を具す、此二魂は人この二魂は人の和魂は禍津日神と具し給ふなり故に天照大神の和魂は直毘神と化生し同この和魂は禍津日神と具し給ふなり故に天照大神の和魂は直毘神と化生し同靈四徳の圖を見るへし神今之を束ねて云ふときは、仁義の二この二なり故に古語に仁者衆善百行之始この二と有て、是を四方に配すれば、四徳の元にして春の發生、神氣の恵みとて艸木の芽を生ずるの時あり、義は宜ありと有て何事も正當の事を行ひ宜しく捌をする義この二よて四徳の利この二お當る秋の徳よて物の性を遂げ、稻の實りたるが如く何事も成就この二せるの時あり、是の如く四時行はれ百物成この二も皆委神の主宰し給ふ所あり、況や、人は萬物の長なれば彼の和荒二魂を賦與して君臣父子の道を全ふし、人の人たる道を行はしめんと思召さる、を、愚者は其とは知らず、却て

神慮かみこころを戻り、吾天賦の眞をかみこころ忘失して、人欲の私より妄りかみこころと彼の二魂を變動かみこころせるが故に、眞の妙用をくらし、自損かみこころ々他の障害を來す者、少からず、譬へば、火は日用欠くべからざる貴重なる物なれども、一朝過つ時は山野を燒枯かみこころ去、人物をも害かみこころふが如し、慎かみこころますは有るべからず、  
以制七情萬念之妄、自生育天地万物、

七情しちじやうと云、喜怒哀樂愛惡欲しちじやうあり、此は眼耳鼻舌身意の六根、物しちじやうと觸れ境に感しちじやうじて、心の動くを名けて七情と云ふ、即ち心の活用しちじやうをれば、是亦かくて成らざるものなれども、眞しちじやうよ困て活用しちじやうく時と善とあり、妄しちじやうよ困て活しちじやうく時は惡とありて、所謂和荒二魂を私しちじやう穢しちじやう者なり、然れども彼の眞神を信仰敬事しちじやうする時は、其利益として神の方より罪穢を消滅しちじやうあし下され、妄より生ずる所の七情を始め千万の邪念を制止し給ひて、眞心の活用二魂の妙用を全しちじやうふせまめ、自ら天地萬物を生育する、造化の



用を賛奉る徳を生ずるなり、

然しかれどもむむしう無な臭にお、虚こ空う同どう体たい無な其その住じ處ちう、常じょう住じ吾わ人にん心しん想じやう中ちゆう吾わ心しん魂こん一いつ而に不ふ二に、

本教眞訣に、耳目所不及は、聲臭無な可た迹あとと、有あが如ごとく虚空同体こくうどうたい、初學者者しや是ぜの

義を誤解して斷無たんとむに御座して、天地間所として此の神靈の坐まささる所

あり、故ゆに住所じゆうじよなしと云ふ、然れども人誠心を以て憶念おくねんする時は、其の清

心しん又また住じし給たまふと、譬たとへば一月大千を照せども、影清水えいしみずに宿とどるか如ごとく然

れば吾わ心しん清淨しやうじやうなる時の、神明と不二ありと觀みずべし、

從其所發而現妙用與眞福、所求圓滿具成、

各自信仰の淺深厚薄あるが故に、其の現あらはす所の妙用その與ある所の

眞福しんぷく、大少輕重各異たいしやうけいじゆうかくいれり、譬たとへば艸露池水共くさろのつゆいけのみ、水みづあれども、其廣狹くわうかうに隨したがつ

て月影の大少有が如し、故ゆに人々の求る所の信心しんしん、依よて何事なにごとも、圓滿えんまん具成ぐせいすとあり、

具成すとあり、

自天地未剖判時、至後世萬劫、莫離斯理、宜勇進奉行、

前段ぜんだん云へるが如く、天地未剖判いまだたはらばせざる時より、此の大神坐して、幾千

萬歳の末までも、無窮むしゆう万物を造つくり化くわ々くし給たまふ、其神理は一息の間も離

る、事ことあき故ゆに、人たる者宜よろく勇ゆうみ進しんみて神道しんどうを、尊信そんしん奉行ぶぎやうすべし、

中教正本田瑞穂ぬまか教徒のた先に御嶽教の祝詞を  
もをいとね母故ははるよとき明あしたまふをふかくかまけ  
て

大教正 平山 省 齋

夜もすがら乳布ちちふさふくめてわが  
子こらにさちあれとのみ祈いのるこ、  
ろろ

○附録御嶽山開闢緣由

掛卷母恐伎御嶽の大神の鎮座を、信濃國筑摩郡御嶽山開闢の緣由を尋ぬるに、人皇六十代醍醐天皇の御宇、延長七年、京師北白川宿衛少將重頼卿、嗣子あきを愛ひて、御嶽大神へ祈願して男女二子を設けたり、男を阿古太丸と云ひ、女を利生御前と云、然るに重頼卿大神の靈夢を蒙る事屢として登山せんと志し、御嶽の麓なる黒澤の郷谷津の農家を宿とし百日潔齋し給ひて、而後山頂の大神に奉幣し給ふ、其時道にて食を炊き給ひし所を飯の森と云、扇を置き給ひし所扇の森と云、杖を置き給ひし所を杖の森と云、潔齋の地を白川村と云、鎮守は重頼卿の靈を祭りて、白川明神と稱へ奉りき、是御嶽山の舊跡として墨澤口と云へり、爰丹利生御前は、父重頼卿を慕ひて行けるに、道を踏ちかひ御嶽山の南、王瀧の郷に至りけるが、幸ひ此の所の岩戸瀧にて身を潔め齋

して登山せしは、御山の七合目ある田の原と云へる處お至りける時、神童現はれ是より上へと女人の登るべき地にあらずと示し給ふに因りて、此所に止ると云へり、故に山上を女人禁制と云ひ傳へたり、後よ普寛行者御山開きの際、利生御前の靈を大江權現と稱へ祭り、先よ現とれし神童を金剛童子と當時兩部神道の盛ふる故に是は名しならんか勸請し給ひき、所謂御嶽登山王瀧口是也、人王九十三代後二條天皇の御宇、徳治二年木曾義仲の孫讚岐守家村、深く御嶽大神を祈り神助を蒙り、軍功お依て、信濃國筑摩郡を領せ、故に其報賽として、祭祀嚴肅あらしめんが爲め、全國諏訪神社の神官の内より撰び招きて、常住の神官とあし奉仕せしむと云、其後七十六年を経て、人皇百一代 後小松天皇の御宇、至徳二年木曾伊豫守家信の志願お因て、黒澤の郷字下殿へ新丹一社を造立し、若宮と稱し神領として、拾四丁餘歩の耕田を寄附せと云、是本社若宮

の謂れあり、人皇百十四代、東山天皇の御宇、永録三年六月、木曾伊豫守源義昌よしまさ、一百日潔齋して登山奉幣し給ふ時、神徳を仰ぎ九合目より白川明神の祠ほくらを建ると云、人皇百十八代、後櫻町天皇の御宇、明和五年、尾州市下の産、覺明行者は、御嶽山開闢の大志を發し、西野末川村より尋ね入りしと、其村民等とも田水少く食み乏しきを患ひしかば、覺明行者大神に誓ひ田水を祈り出し、神託み依て田地二十四丁歩を開墾し、此處み數年の間木食難行し、且暮御山の百間瀧みかゝり、内外清淨よしして、終に天明元年登山の道を開き、數日よしして頂上ちやうじやうに至る、時より老翁忽然として現れ告て云、汝苦心して山路を開かんと欲せど雖も、未だ時至らずと、依て覺明行者と、御山より靈魂を止めんとて、天明六年二の池の邊りある巖堀いわくわに入り定せり、其骸からだ三ヶ年を経れとれ更に變せざるを以て、信徒その靈威れいゐを畏み石室いしむろに納むと云、是即ち黒澤口、中興開山覺明

行者あり、明治十六年二月廿日、御嶽教中興の講祖覺明靈神と追稱せ、給ふ、人皇百二十代、光格天皇の御宇、寛政元年、武藏國秩父郡の産みして、舊江戸湯島なる、眞言律靈雲寺しんごんりつれいぐんじの徒弟普寛律師ふかんりつしと敬神の志深く、神道の行者と成、常丹御嶽大神を信仰せ、或夜靈夢れいむを蒙り、御嶽山開路の志願を發し、屢杖を曳と雖も、素より屹然きつぜんたる高山あれば、容易よ登り難き、何れより便道よきみちを開かんと燒慮する折しも、二鳥の導きに隨ひ開くべしとの神示を蒙り、即ち雷鳥と云へる鳥の行み隨ひ王瀧村より道を開き初るに、不思議や老若の二神現れ、神通自在の働きをなし、僅かみ一七日間より六里餘程を開墾ひらくして山頂やまのいたてに至るも、老翁告て云、抑此の山と天地開闢以來穢れたる事あき大清淨の靈地なれば、天地開闢の神祖かみを祀るべし、我は長崎明神なり、是あるは猿田彦神なりとのたまひて去り給ふ、之み依て、國常立尊を勸請し、大己貴神少彦名

神を併せて、御嶽三柱大神と敬祭し奉れり、又其後日本武尊猿田彦神長崎明神を祭祀し給ふと云、爰に普寛行者神託に依て誓を立て、諸國を經歷し數多し病者を救ひ、吉凶を示し惡を懲し善を勸め教導し給へは、歸嚮する者數千人に及ぶと云、明治十六年二月二十日、御嶽教中興の講祖普寛靈神と追稱し給ふ。人皇百二十代 光格天皇の御宇、享和年中信濃國小縣郡の産、一心行者と普寛行者の教法を傳承し、常よ木食水行をなし、敬神の志益深く、御嶽山上よ國狹槌尊、豐斟淳尊、伊邪諾尊、伊邪冊尊、天照大神、保食神、を勸請し奉り、自ら山河を跋渉して神教を布き、祈禳禁厭を修して患者を救助するに、其功驗あらずといふとまじし、故を以て神徳益四方お輝き、需めずして信徒の固結すると二十餘ヶ國よ普及し、毎歲登山の輩万を以て筭ふる乃至ると云、然るよ凡俗は神徳の奇靈あると行者の修徳とに依て祈禳禁厭の現驗ある

の理をしらず、人を怪み法を疑ひ種々の誹謗惡説をあす者世よ紛々たるを以て、終身幕府の疑ふ所となり、俗人よ祈禳禁厭を修行せしめし廉を罪として、文政四年五月流刑に處せられしが、其後教法の益弘るお隨ひ、行者の徳光愈世に現されしかば、没後弘化四年四月赦免せられき、明治十六年二月二十日、御嶽教中興の講祖、一心靈神と追稱し給ふ、吁呼三靈神が神徳を仰ぐと云、御嶽山の頂上よりも高く、開道布教の志は、御嶽山の御池よりも深し、故よ數十年間艱難辛苦を嘗て飽事あく、終よ此大業を成せり、其れ本教を奉ずる者、思とさるべけんや、盡さるべけんや、故よ今御嶽山開闢緣由を畧記して世よ知らしめんとす、猶三靈神履歴の委きは、其傳記を見て知るへし

○附錄神徳教以呂波歌

此と童蒙をして、神徳の廣大あるを知らしめんがためよ每句の頭に、

いふはの文字を置き、俗言を以ていと易らかよものせる故、言拙く  
意を盡さざる事多し、看ん人文辞の鄙拙を尤ずして、神徳の巍々ある  
を尊み敬ひてよ、

明治廿二年五月 駿州駿東郡永原 千秋 舍 岳 翁 識

いとも尊とや日の大神の  
はあつ光の大御恵みは  
ほかの國々島々までも  
とほき神代の流れの末を  
りやく受たき願もあらば  
るいも世みなき吾皇國の  
わけて尊き國常立の  
世々の帝の御祖の神と

ろくも寶も幸はへたまふ  
よしも東も天つちかけて  
へだて給とぬその神徳が  
ちかく此の身お汲も嬉し  
ぬる間起る間心よかけよ  
をしへ怒み眞心ろ盡くせ  
かみの御稜威は天方高し  
たれも仰げよその神徳を

れい義仁智も身の程々よ  
つねよ皇國を愛して守れ  
あべての人丹食物着もの  
むぎや稻穂のよく實るも  
る薬の方術御定めたまひ  
おほ國主の命は身をば  
やまと魂うけたるひとは  
けんは熱田も鏡は伊勢も  
こゝろ一つに智勇の徳を  
てん地万物御主宰あされ  
さらよ譬ん物こそあけれ  
ゆゑしかりける穢を滌ぎ

そへて賜へる造化の神理  
ねても念るあその神徳を  
らくよ住家を爲しめ給ひ  
うけもち神のその神徳が  
のをも山をも開拓あまて  
くにの御爲よ盡させ給ふ  
まつり尊とめその神徳を  
おかき謂れを殘して齋る  
ぬさせたまふは其御徳が  
あめの眞中よ座坐す神は  
き妙不思議のその神徳が  
めさん清めて伊邪那岐の

ゆゑは思  
々しの意よ

みこと自から祓除の徳を

ゑんも靈魂も産靈神の

もくち方の病をなほえ

そくち御神のその神徳は

山よりも御稜威みいつが高き海よりも恵みめぐみがふかき天地の神

とこしへも動かぬ國のみ柱を立しは神のたかきいさを

参登る人とみたけの山風も身のうき雲も晴てこそゆけ

から人もあふがざらめや御岳山たかく尊き神の御稜威を

み心をひとつよなして爲しませる神の功をいさ思へ人

信徒等か神の道みちすまんだよりよもかなと筆のすさみも門人

のよめる道歌を左ひだりみるまぬ

神徳といふ事を

箱根温泉村宮ノ下

安藤兵治

しめ給ふが實まことは有難き

ひろき産靈むすひのその神徳かみが

世界安らふ人をばすくお

京も鄙いなかもみち尊たかとむら

御嶽山神の恵みもふかみぞり松の葉のごと道みちが榮行

全

松田吉昌

月は峰雲は籠かこみみたけ山神の光ひかりがさやかありける

全

松下鶴吉

わき出る元をみたけの山水のすゞしき味は吞てこそしれ

東京神田平長町

土屋直行

善悪よともうつると聞ば御岳みだけなるみ池いけが神の鏡ありける

常陸國東茨城郡世樂

八文字鐵之亟

御嶽山高ねの月つきとふし拜まがむ清きよよき心こころも宿るとぞきく

駿河國駿東郡永原

永井長十郎

曇りける心の罪も吹き拂はらふみたけの山の風の涼しさ

全所

本田友吉

雲霧を伊吹き拂へは御嶽山高ねの月も身をや照さん

全郡中清水

勝田清七

身滌して清き心に宿るか多神路の山の峰の月かけ

全郡永原

本田正苗

神路山神のをしへは神葉のさかゆくがごと榮ねて予行

全郡御殿場

長田喜七

露の身のかく消やらで世よあるも産靈の神の恵み也けり

常陸國新治郡石岡

小松崎熊久

御嶽山みねの嵐と參登る人の穢惡を祓ふなりけん

駿河國駿東郡杉名澤

根上謙次郎

愚なる身も皇國の大道をふみ行はば神やまもらん

禊祓といふ事を

全郡下一色

林頼藏

禊して心もそとし飛鳥川きのふにかはるけふの波風

全郡川島田

芹澤十四雄

尊とさは何乎譬へていとし水清きみそぎの神の教へを

全所

永井伊太郎

罪とかを祓へはうきもしら波の清き川瀬に流す形代

全郡塚原

杉山幹三郎

種々の罪も病も消えつる祓の式を受くるうれしさ

全郡杉名澤

子上吉次郎

祓へ人心の罪も消るまでしづが苜環くり返えつゝ

全郡グミ澤

芹澤金五郎

祓所の神の恵みのなかりせば心の枉をいかで直さん

全郡萩原

勝又要吉

宮川の清き流れのみそぎまて心もすめるけふのすゝま

全郡グミ澤

芹澤 嘉平治

はらへまて神の恵みを蒙りま嬉まさは身も餘りける哉

全郡川島田

芹澤 好直

積りつる罪を祓に消はて、心清まるけふのうれま

祓修行不可怠といふ事を

全郡永原

本田 瑞穂

ふく風も任せて拂ふ青柳の糸おはちりも積らざりけり

伊吹祓の心を

全 所

全

御伊吹も晴たる霧のそれよりも深き罪さへ消る神業

罪咎をふき捨てこそ鴈鷗の息長河に浮ふ瀬もあれ

御嶽大神を拜み奉りて 右全所

本田 安佐子

みたけ山神のみ影と朝夕につくす心も添ひたまふらん

箱根温泉村宮ノ下

安藤 とく子

御嶽山神のめぐみの廣ければ深き願ひもかなふとぞ聞

常陸國水戸下市

中村 川瀬

曇るとも何か歎かん月影を又もみたけの風に任せて

全郡東茨城郡世楽村

八文字 梅子

みたけ山雲はか、れを曇りなき心を照せ神のみひらり

駿河國駿東郡永原

根上 たけ子

御嶽やま神の光よてらされて心の暗も晴るうれま

水戸下市在吉田村

小倉 傳造

老か身もやそく登らんみたけ山導く人を杖と頼みて

祓

全 在吉沼村

橘川 幸三郎

祓へまて川瀬も流す菅の葉の清々も身は成まけり



東京淺草區永住町 駒宮正明

みたけ山麓の瀧よみそぎしてまかむる月とわきてさやけま

祓修行またる夜 信州水内郡大豆島村 西澤安藏

松風よ高ねの雲は消はて、月影きよき谷川の水

保食神の功を思ひて 全所 山岸才吉

齋つくる虫を見てだよ保食うけもちの神の恵みをおもはざらめや

伊吹祓の心を 駿州駿東郡中清水 勝又與平

朝夕に心のちりをふき拂ふ伊吹が法のと、き也ける

神國といふ事を 全郡保土澤 菅沼權五郎

すめらぎのまらせる國は八十國の中よ秀たるこれの神國

東京淺草駒形町 葛田藤吉

計りなき神の恵みそ有かたき人の業よは限りある世み

箱根温泉村宮ノ下 石川順吉

汲人の心おかげず宿りける月を見岳の谷の流れを

東京府下南葛飾郡梅田村瀧澤 又五郎

御嶽山み池の水の底おかき神の恵みおあふそ嬉まき

駿州駿東郡杉名澤 根上不二男

神鏡やうつゑ見かへるわかこゝろ

全郡駒門 勝又孤山

濁りなき千代の流れやみそぎ川

全所 勝又孤隣

神風のめぐみ見おけり春の山

全郡川島田 永井龜三

神鏡ようつりて清き宮の梅

全郡グミ澤 齋藤花守

神風のまゝあひくやいと柳 全郡コマ門 上杉源三郎

榮ゆく宮の根じめや松さかき 全郡杉名澤 子上也と子

月もけあわけてさやけま身濰川 全郡ホド澤 菅沼順平

神風にまひかぬはまゑ四方の稻 全所 土屋喜十郎

大神へ掛魚あげて年のくれ 箱根温泉村底倉 葛田みち子

胸のちり流して清しみそぎ川

全郡グミ澤	齋藤花守
全郡コマ門	上杉源三郎
全郡杉名澤	子上也と子
全郡ホド澤	菅沼順平
全所	土屋喜十郎
箱根温泉村底倉	葛田みち子

本書出版賛成員

駿河國駿東郡川島田

永井甚平	永井治平	芹澤九平	芹澤万吉
芹澤平十郎	芹澤熊藏	全郡中清水	芹澤寅藏
勝又房五郎	勝又喜平治	全郡駒門	野田斧太郎
勝又彌平	勝又權四郎	鈴木常吉	持田惠七
全郡ゴテンバ	小野三代之一	全郡一色	鈴木勝五郎
加藤彦十郎	湯山好藏	勝又喜十郎	加藤政次郎
田代新平	林政吉	全郡保土澤	原茂作
勝又彦八	武藤倉次郎	全郡グミ澤	勝又順平
全郡東田中	芹澤長次郎	全郡中畑	立道伊太郎
武州南葛飾郡原村	沼野清次郎	豆州賀茂郡冷川	福島義作
全郡徳永村	杉本作太郎	全郡田方郡矢熊	杉本治郎左工門
			鈴木義雄

K-33

明治廿二年五月廿九日印刷  
全 年六月一日出版

定價金貳拾錢

版權登錄

有所版權

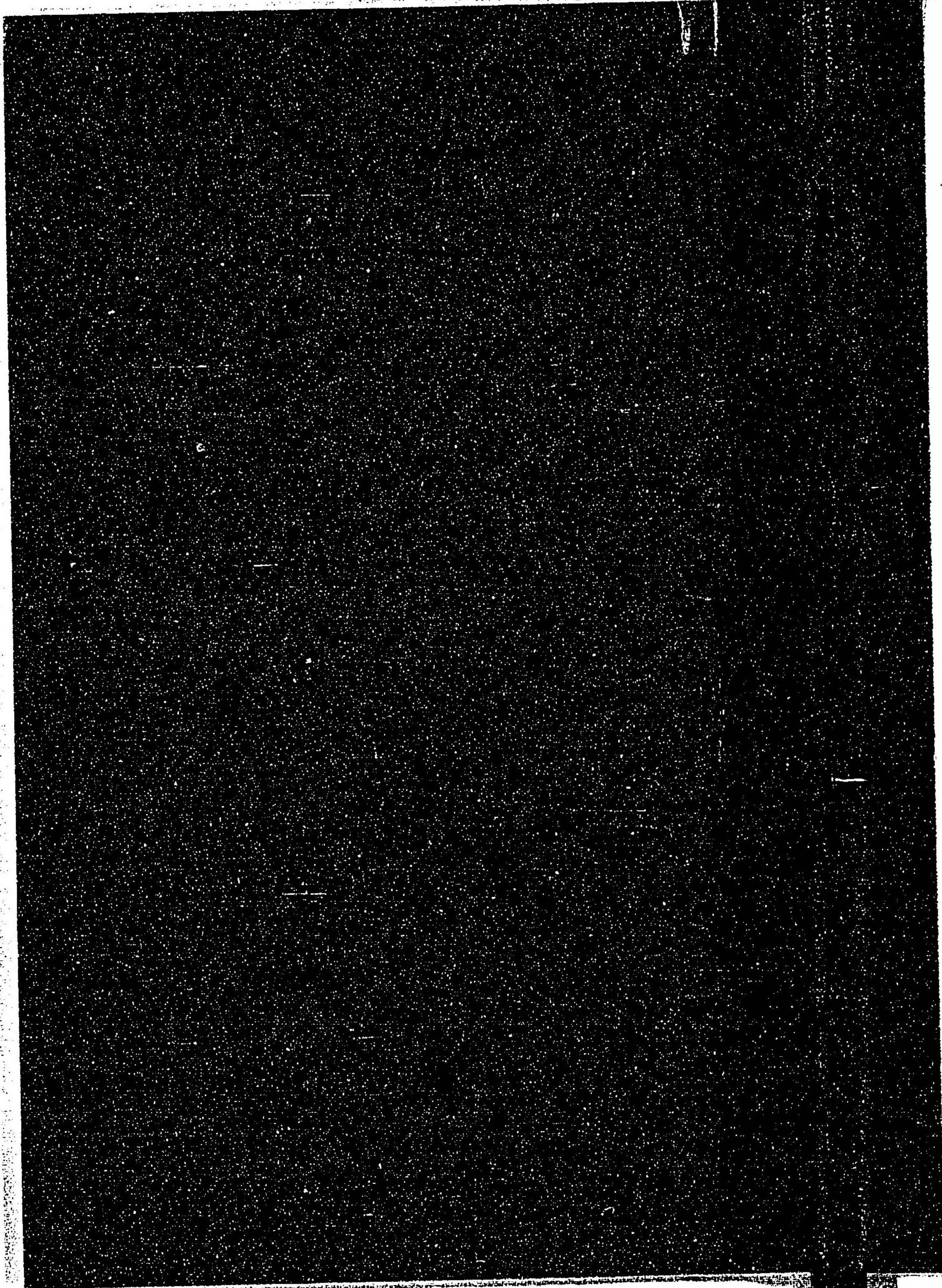
靜岡縣下駿東郡原里村杉名澤六拾四番地原籍  
東京府下日本橋區吳服町十七番地寄留  
著述者 兼 本 田 瑞 穂

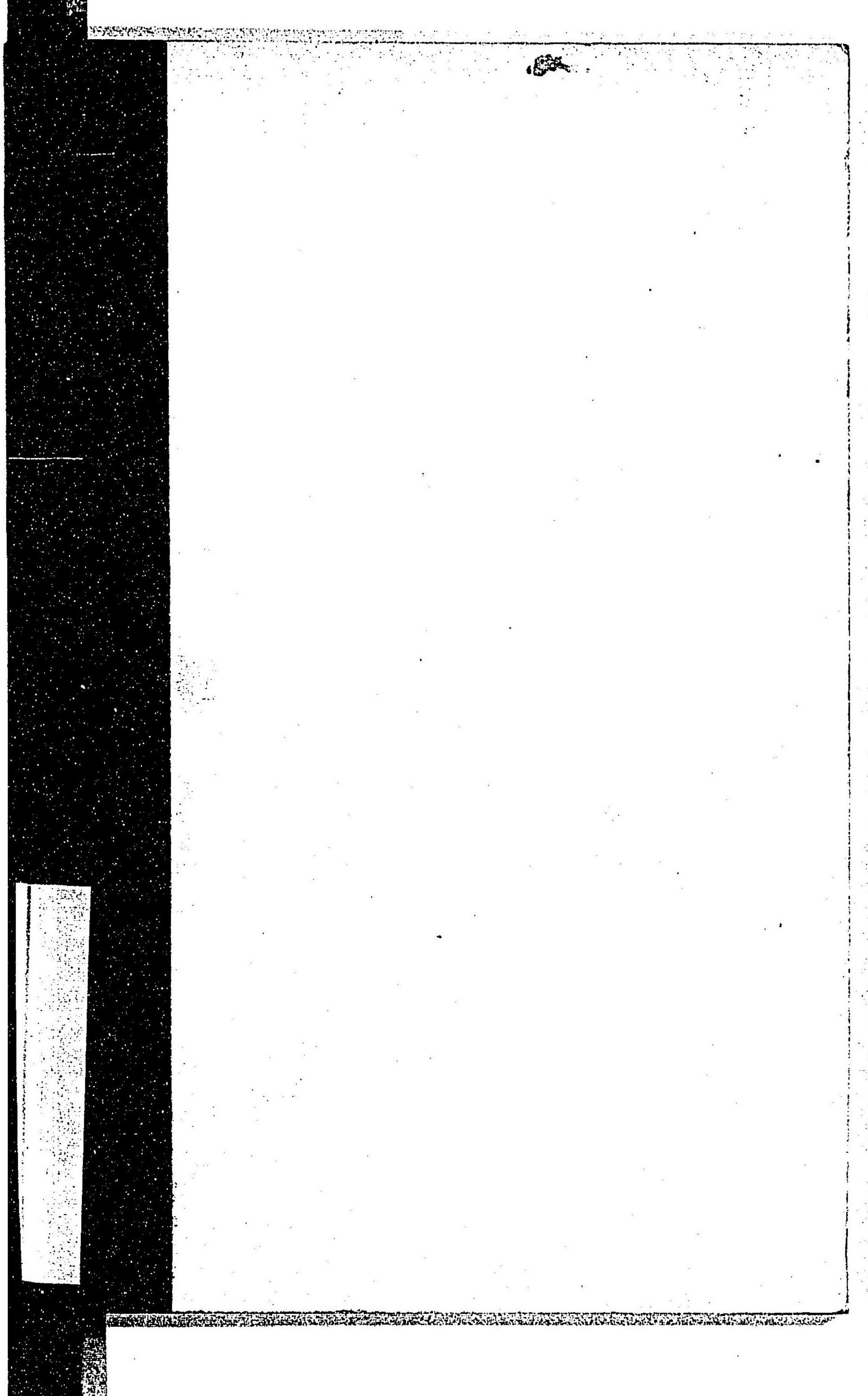
發行所 祓教會本院

印刷者 大石喜太郎

全府下全區全町全番地  
印刷所 明昇舍

祓心法 本教要義全一冊 中教正本 田瑞穂著 既出版  
鎮魂學





特49

361

御嶽教三要祝詞略解

本田瑞穂

国立国会図書館

示  
複  
写

014640-000-7

特49-361

御嶽教三要祝詞略解

本田 瑞穂 / 著

M22

ABB-1071



